

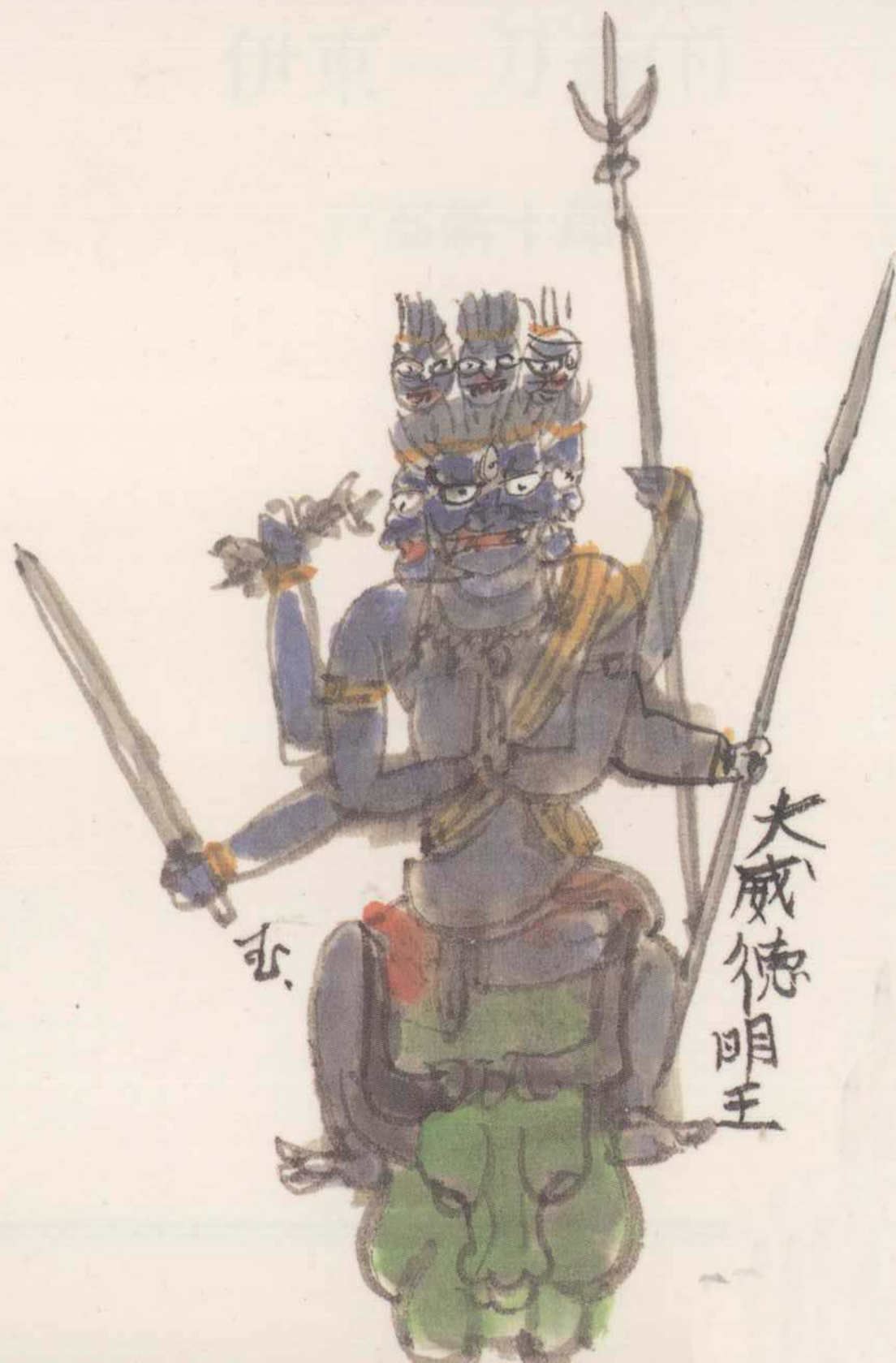
光 文 社 時 代 小 說 文 庫

伊東一刀齋

下

長編剣豪小説

戸部新十郎





光文社文庫

書下ろし／長編剣豪小説

伊東一刀斎（下）〈絶の章〉

著者 戸部新十郎
とべ しんじゅうろう

1990年2月20日 初版1刷発行

発行者 大 坪 昌 夫

印刷 大 日 本 印 刷

製本 大 日 本 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03 (942) 2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Shinjūrō Tobe 1990

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71099-9 Printed in Japan

光文社文庫

江苏工业学院图书馆

文庫書下るし、長編剣豪小説

藏書章

伊東一斎
戸部新十郎



光 文 社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました

伊東一刀齋

下卷
絶の章

目次

旌旗せいぎ

七

色付け

三

花の庵

七

螢

一〇三

払捨刀ほつしゃとう

一三四

下り兵法

一五七

一ノ太刀

一八

雲幾重

一三五

転生

一五〇

一刀斎

一七七

解説

武蔵野次郎むさしのじろう

三二

旌旗せいき

一

小田原城は、深い野趣やしゆに包まれている。

先年、当地を訪れた京南禪寺の東嶺禪師は、そのさまを、

「城塁は喬木森々しんしんとし、高館・巨屏相連きよへいなり、三方は大池にして、池水湛々、浅深量るべからず。水禽翼々として遊ぶ」としるした。

おりから、その森々たる喬木は、いちどきに紅葉し、全山鮮やかな彩りを見せている。あおみどろの濠にも、水鳥たちがやってきた。悠々閑々たる風情だった。

が、相連なる巨屏のそこそこには、北条家の“三ツ鱗紋”の幟のぼりや旗がひるがえっていた。旌旗である。旌旗はすなわち、戦いのしるしにほかならない。

といって、そこで戦いが行なわれているわけではなかった。いま、当主氏政、隠居氏康父子

はじめ、北条勢の主力は駿河へ出陣している。つまり留守城だが、北条家では出陣することがあれば、城頭に旌旗をかかげ、武運を祈るのが常だった。

留守大将は、

〈幻庵・北条長綱〉

である。

もう八十歳に近いが、非常のとき、始祖早雲の子として、代々を見てきたこの人物をおいてない。

美少女に手を引かせ、長い藤の杖を突き、香を焚きしめた僧衣の袖をひるがえしながら、静かに城内を歩く姿は、神韻^{しんいん}縹渺^{ひょうびよう}としている。それだけで、城代大道寺駿河守、松田尾張守以下、城衆の気が鎮まるのだった。

その日の朝、幻庵は側御用を務める古藤田勘解由^{ことうだかげゆ}左衛門俊直^{さゑもんとしなお}をともなつて、三ノ曲輪^{くるわ}へ渡る橋のたもとまで出てきた。そこから眺める紅葉のさまが、もつとも美しい。

幻庵はしばらく眺め廻し、ふと、

「だいぶ汚れてきましたね」

といった。

旌旗のことである。毎日、見慣れているので見すごされやすいが、なるほど風雨にさらされ、黒ずんでいる。

「そうでありますな」

勘解由左衛門は答え、それもそのはずだと思った。

甲州武田勢の駿河乱入は、昨永禄十一年の春からはじまった。武田勢は府中を陥し、今川氏真を追放し、さらに勢力を拡大しようとしている。

北条方は黙っていられない。対抗上、出陣して戦い、結局、氏政の子氏直をもって、今川氏真の養子とし、駿河守護にとり立てた。

むろん、名目にすぎず、武田勢の跳梁が激しい。ことしに入って興津あたりで戦い、夏は黄瀬川から三島にまで迫った。いずれも退散させたが、気が抜けない。

ずっとそんな有様だから、城頭にかかげた旌旗が薄汚れるわけである。

「汚れても、何事もなく下ろすことができればよいのですが」

と、幻庵はつぶやいた。

じつは、小田原城は緊張している。一隊を駿河に残し、いったん甲府に戻った信玄が、なにしたか、こんどは一万余を直率して、信州余地峠から西上野へ進出してきたからである。

ついで武蔵に入り、北条方の有力支城である鉢形城を攻め、さらに滝山城に攻めかかっているという。

鉢形城は氏政弟の氏邦が、滝山城は同じく氏照が守る。いずれも堅城である。じじつ、攻めあぐんでいるらしい。

かりに攻め陥したとして、それが武田家にとって、どれほどの戦略的価値があるだろう。

〈信玄はいつたい、なにを考えているのか〉

城衆はみな、いぶかり怪しんでいる。駿河在陣の氏康・氏政にしても、真意をはかりかね、動くに動けない。

ただ一人、幻庵だけが迷わなかった。

〈信玄は小田原へくる〉

と、見極めていいるからである。

城衆のほとんどは、まさかと思った。先年、二度にわたり、越将上杉謙信が小田原に攻めかかったが、城は堅城、士気は高かった。しかもあえて打って出ることなく、固く籠城したので、さすがの上杉勢もなすすべもなく、疲労困憊して退散した。

信玄はいやというほど、そのことを知っている。この多忙のとき、時間と労力を費やすだけの攻撃をするとは思われないのである。

幻庵はしかし、信玄の肚の内を見透かしているかのように、

「悪法師のやることですから」

と笑っている。

もし、幻庵のいう通りだとしたら、笑ってはおられない。すでに選り抜いた乱破を、信玄勢のなかへもぐり込ませ、逐一、動静を告らせてくることになっている。いっぽうで籠城戦の手

筈も整えた。

そうなれば、こんどは城下市民もことごとく郭内へ入れるつもりである。上杉勢が攻囲したとき、領民が少なからず殺傷された。領民を守るのが領主のつとめだ、というのは早雲以来の信条だが、生産や商いにたずさわる人間を失うことの直接の損害は、はかり知れないのである。いざというときに備えて、町々の肝煎りきまいには、その旨触れてある。藤掛寅左衛門など有力商人たちは、早くも米、塩、干魚などを搬入しはじめている。

あとは信玄がどう動くか、知らせを待つばかりだったが、最初の知らせは思いがけないところからきた。

幻庵と勘解由左衛門のたたずむ橋上へ、小姓が駈けてきて、

「獅子ヶ浜より急のお使者でございます」

と、あわただしく告げた。

獅子ヶ浜は伊豆と駿河の国境の要地で、北条方の出城でじろがある。とすれば、駿河本陣からの伝達かと思われた。

「わかった」

勘解由左衛門はうなずき、しかし、

「口上は静かに申すこと。急でない使者はないのだ」

と一言、加えた。

じっさい、このところ各戦線からの急使は、あわただしく出入りしている。いちいち慌てることがないのだが、その小姓の話を聞けば、いくぶんはうなずけないこともない。

なんでも、騎馬武者が、一騎、早川口から城下へ入ったと思ったら、城にいたるまでのあいだ、

「どけ、どけ、どけ……」

と大声叱咤し続け、市民を蹴散らすように、駈け抜けてきた。けたたましいこと、かぎりなかったそうだ。

そいつは巨軀のうえ、大声の持ち主だったが、けたたましさは、なによりもその武具にあった。このころ、武士はそれぞれ工夫して、自ら着ける武具を、異形いぎようでかたどったり、あるいは鮮やかな色彩で飾り立てたりしたもののだが、そいつの武具には、鈴が文字通り鈴なりに付けられてあった。

動くたび、鈴の音がじゃらじゃらと鳴り響くものだから、けたたましく思わないほうがおかしい。しかも、床をどすどすと踏み、

「幻庵さまに即刻、申し上ぐべきことあり」

と怒鳴ったそうだから、平生落ち着いた小姓も、ついつい慌てたのも無理はなかっただろう。
（なるほど、かの仁じんであったか）

と、勘解由左衛門は思わず笑った。

その男なら顔見知りである。名を、

〈今井左衛門尉敏平〉

という。

獅子ヶ浜城の城代をつとめるが、名物男である。鈴なりの武具はさておき、なかなかの豪士で、さきごろの戦いに、敵を組み敷き、いざ首を掻こうとしたら、鎧通しが折れたので、そのまま素手で首を捻じ切ってしまった。

相撲が好きである。よく浜へ出て、漁師たちを集めて相撲をとる。それから車座になって、茹であがった小蝦を肴に酒盛りをして楽しむ。気さくな性で、たれかれとなく地方言葉で親しく語り合う。浦々一帯にも人気がある。

巨軀でありながら、身が軽い。なにか異変を聞きつけようものなら、自分で注進に及ばずにはおかない。

ただし、いくぶん軽忽なところがある。早のみ込みや、かれ自身の勝手な推測を加えたりして、失敗することもしばしばである。

いつぞやは、沖を通りかかった北条方の軍船を、里見海賊と見間違え、單身漕ぎ出して斬り込もうとしたことがある。間違いとわかって、旗印をかかげないのが悪い、とひと理屈をこねた。もっともな話だが、だいたい理屈もまた、多いほうである。

「今井敏平どのと存じます」

勘解由左衛門がいうと、幻庵もその名を承知していたのだらう、一つ二つうなずいて、

「こちらへ」

といった。

小姓はすぐに敏平を案内してきた。というより、敏平のほうがほとんど小姓を従えてくるような威勢で、肩を聳^{そび}やかして現われた。

むろん、かの鈴の音がじゃらじゃらと鳴った。鈴といえば、幻庵の腰にも小さな鈴が吊るされている。これは世話する少女たちに、身の所在を告らすためのものだが、その音は冴えて美しい。

それが対応するかのように、微かに鳴った。

二

敏平はまず、

「駿河の国の住人、当時、獅子ヶ浜にまかりある今井左衛門尉敏平でござる」

と、いくぶん緊張気味に名乗ったあと、顔見知りでもあり、ほとんど幻庵と一心同体のような身分立場をよく承知している勘解由左衛門に対し、

「お人払いを願ひ奉る」

といった。

勘解由左衛門は逆らわず、少し離れて背を向けた。が、その必要はまったくなかった。そこいらじゅうに聞こえるほどの大声で、

「信玄どのの軍勢は、ほどなく小田原に攻めのぼって参るものと愚考^{つかまつ}仕りまする」と申し立てた。

幻庵も逆らわず、耳を傾けたらしい。といって、別段、武田勢の動きを現認したのでなく、内容は愚考にすぎなかった。愚考が人払いしてまで急を要する報告であるかどうかかわからないが、幻庵は、

「それはそれは」

と、さも驚いたように応じた。

敏平はついで、その理由らしいものについて述べ立てた。

「なんとなればでござる。わが身内にて、武州鳩山在に居住いたす者がござる。その者が馳せきたって申すには、武田の軍兵^{ぐんびょう}どもが、おっぺ川にて馬どもの脚を洗いつつ、小田原に入り、美味なる海魚をば食いたきものよと、語り合うていたよし」

「そうでしたか」

「いま一つは、手前、かねて習い覚えた軍配^{ぐんばい}でござる」

「ほう、軍配を心得ていらっしゃるのか」

軍法のことである。どのようなものか、幻庵は興味をもったに違いなく、